

認知症サポーター新聞

「認知症界のレジェンド」

長谷川和夫先生

今回は、長谷川和夫先生についてご紹介したいと思います。

認知症に関する国の政策がまだなかった1960年代後半から研究と臨床に携わり、精神科医で認知症医療の第一人者です。2017年には自ら認知症になったと公表。「診る側」「診られる側」双方の立場から社会に発信し、認知症と共に歩んだ92年の生涯でした。

その功績として真っ先に挙げられるのが、1974年に公表した「長谷川式簡易知能評価スケール」です。「これから言う三つの言葉を言ってみてください。桜、猫、電車」「100から7を順番に引いてください」などの

質問からなり、診断に使われる認知機能検査です。「1974年」という世界的にみても早い時期にこの診断の「物差し」を開発しました。

2000年に、高齢者痴呆介護研究・研修東京センターのセンター長になってからは「パーソン・センタード・ケア(その人中心のケア)」の普及に努力し、ケアの分野でも大きな足跡を残しました。「パーソン・センタード・ケア」は、米国の牧師、心理学者で大教授だったトム・キットウッド(1937〜98年)が提唱した概念で、その人らしさを尊重し、その人の立場に合ったケアを行うことを指します。

2017年には自身も認知症を発症しました。認知症診断

【発行】
泉地域包括
支援センター
リンデンバウム
Tel 896-5960
Fax 864-3006

の際に「長谷川式認知症スケール」は使えなかったそうです。なぜならば自分自身が作ったので質問内容を全部覚えていたのですから。長谷川先生は自らの診断名を「嗜銀顆粒性認知症」と公表しました。

嗜銀顆粒性認知症とは

これは病学的な診断名で、脳内に独特な嗜銀性顆粒を求めると特徴とします。「嗜銀顆粒」とは4リピートタウと呼ばれるたんぱく質の異常蓄積の事です。銀染色により紡錘型・コンマ状で描写されています。高齢期に発症が多い認知症で、記憶力障害より、易怒性、妄想、不機嫌などの症状が目立ちます。周囲の方の対応は難しいのですが、日常生活も

自立しているのが特徴です。治療法はアルツハイマー型認知症と基本的に一緒です。

認知症を自ら公表

「大事な今は今を生きる」と

「認知症になってかえって世界が広がった」「自分が住んでいる世界は昔も今も連続している」との言葉も聞かれましたが認知症になったことを決して喜んでいたわけではありません。恥ずかしかるとか、隠すことはせず「なったのはしょうがないけれど認知症を抱えて生きていくのは不幸ではない。ありのままを受け止めて自分のできることをしながら後は運命に任せる」と話されていました。

2040年には約600万人と、高齢者6.7人に1人が認知症になると見込まれる時代に生きる私たちにとって、とても参考になるように思います。

(読売新聞オンラインより一部引用)